『新青年』における〈猶太〉表象研究

村松まりあ

1. はじめに

一九一七年のロシア革命や、それに引き続くシベリア出兵を契機に、日本にも『シオン長老の議定書』に基づく「ユダヤ陰謀説」が流入した。それまでにもシェイクスピアの「ヴェニスの商人」におけるシャイロックをもとに、ユダヤ人に対する「否定的なイメージ」が形成されていたものの、「ユダヤ陰謀説」の流入は、日本における「ユダヤ人問題」議論の契機となった。[1]

高尾千津子[2]によれば、日本に初めて伝播した『シオン長老の議定書』（以下、『議定書』）は、陸軍諸学校教授でシベリア出兵時、ロシア語通訳官であった樋口艶之助がウラジオストクの実業家スピリドン・ディオニスィエヴィチ・メルクーロフから入手した『議定書』を『過激主義ノ真髄』として翻訳し、それを陸軍参謀本部に送ったものである。その後、『議定書』は一般に向けて公刊され、一九二〇年代中頃には「ユダヤ陰謀説」が人々の間に流通していった。

さらに一九三〇年代には、日本は対外進出を果たしていくなかで、その先に在留しているユダヤ人の処遇を政治的課題とするようになる。[3]このように実際の経験を通じて言説やイメージが形成されていくのではなく、イメージの流入が先行し、実際的課題となったという段取りを経たことは、日本における「ユダヤ人問題」を検討する上で重視すべき点であろう。[4]

以上を踏まえ、本稿が着目するのは、〈猶太〉に関するこれらの言説が、人々にどのような思考回路をもたらしたのかということである。その点を考察する一つの手掛かりとして、一九二〇年に博文館より創刊された雑誌『新青年』をとりあげる。探偵小説のみならず、ファッションやスポーツ、映画など、多岐に亘る翻訳文化を紹介した『新青年』において、〈猶太〉にまつわる言説がどのように受容・再生産されたのかを明らかにすることで、それにまつわる想像力を考察していく。

なお、以上の観点から、本稿では〈猶太〉という言葉を用いる。ここでの〈猶太〉とは、「ユダヤ人」[5]という特定の人々を指し示す言葉や、「ユダヤ教」[6]といった宗教を示す言葉ではなく、それ

らがない交ぜになったイメージの総体を意味するものである。また、ここで今日一般的なカタカナ表記ではなく、漢字で〈猶太〉と表記するのは、同時期にはこの表記が広く用いられていたことに加え、言葉が流通する際には、表記が与える印象がそのイメージに寄与していたと考えるからである。

2．なぜ『新青年』なのか

〈猶太〉について考察するにあたり、本稿が『新青年』に着目する理由として、本誌が翻訳から教養を得ることに意識的な雑誌であったことが挙げられる。

創刊当初、前身の『冒険世界』の性格を引き継ぎ、地方農村の青年を対象としていた『新青年』は、「外国の探偵小説を中心とする文芸作品の翻訳掲載に力を入れ[7]」ていた。「外国ものをそのまま扱」うという他誌では見られない方法で探偵小説を掲載し[8]、そのうえで自らを「高級娯楽雑誌」、すなわち、知的な階層を対象読者と位置づけた[9]『新青年』は、探偵小説に留まらず、ファッションや映画などを紹介し、「つねに時代の動向に敏感」な「時局雑誌の性格すら帯びていた都会人向けのメンズ・マガジン[10]」であった。

一方で、デイヴィッド・グッドマンらが「日本人は西洋の文献の翻訳を読むことによって、ユダヤ人についてのイメージをいろいろ知るようになった[11]」と述べているように、〈猶太〉にまつわる言説も、西洋の文献の翻訳を通じて国内にもたらされた。加えて、宮澤正典[12]は「ユダヤ陰謀説」を「扶植する土壌」として「明治時代に翻訳されて普及していた『ベニスの商人』」があったことを述べ、その結果として、「ユダヤ陰謀説」が「庶民層よりやや上層の〝教養〟となっていた」ことを指摘している。このように翻訳という視座から検討すると、『新青年』が外国文化を積極的に翻訳し、「知的な階層」の読者に紹介していた一方で、〈猶太〉にまつわる言説も、西洋の文献から翻訳され、それが「教養」とされていたことが確認出来る。

しかし、さらに強調したいのは、『新青年』の対象読者と、第一次世界大戦及びロシア革命前後のユダヤ人が通底する問題系を抱えていたということである。

農村青年や農村出身の青年たちを対象読者として出発した『新青年』は、海外雄飛のイデオロギーが創刊期の編集の重要な柱であった。川崎賢子[13]によれば「兵力の後楯に依存することなく定住」し、「仮に成功をおさめ資本を蓄積したら、かならずそれを現地に還元すること」がその海外雄飛の内実であった。この「国家の拡大と同致することのない海外雄飛」は「学歴にも財産にもめぐまれず共同体から脱落した青年たち」の「挫折した立身出世の観念的回復をはか」る契機となっていたという。

ところが、そうした創刊期の性質は時代と共に変化を余儀なくされる。松山巌[14]は、『新青年』が創刊された大正初年頃までは、「青年たちが都市や海外を問わず外へ出てゆくこと」が「現実性のある夢」であると同時に「上から要請された時代」であったのに対して、大正末期には、第一次世界大戦後の不況や、日系移民の排斥問題によって、青年たちの間に「アイデンティティを喪失した気分みたいなもの」が出てきたことを指摘している。さらに鈴木

貞美[15]は、その青年たちに対し、「共通性をセットしていくような装置」となったのが『新青年』であったと位置づけている。

このように、『新青年』が対象読者としたのは、第一次世界大戦後、国民国家の枠組が強固になっていくなかで、「アイデンティティを喪失した気分」を共有した青年たちであった。一方でそうした国際情勢の変化は、ユダヤ人をとりまく状況にも大きな影響を与えた。

I・ドイッチャー[16]は、ロシア革命前後の時期、ユダヤ人がおかれた状況が、東欧のユダヤ人と西欧のユダヤ人とで全く異なっていたことを指摘している。そもそもロシア革命は、それまでは「「第二または第三種市民」という階層に属し」、「ユダヤ人地区に限って居住をゆるされていた」東欧のユダヤ人たちにとって、その「差別待遇と圧迫から自らを救う」手段として受け入れられていた。しかし革命は、それ以上に、ユダヤ人がそれまで続けてきた「中産階級の小商人」としての生活様式を解体させた。その結果、都市においては、「ロシアの社会主義の発展を阻害する」「根のないコスモポリタン」として、農村では革命政府の手先としてユダヤ人は憎しみをかう結果となった。

一方、それと同時期に、西欧のユダヤ人たちの中では政治運動としてのシオニズム運動が高まりをみせていた。しかし、東欧のユダヤ人は、それに反対する立場をとった。なぜなら、彼らにとって「祖先代々何百年もの間住みなれた国々から「脱出」（エクソドス）（ユダヤ人はすでに旧約聖書時代にエジプトから脱出している）するという考えは、自分たちの権利を放棄し、敵対する者の圧力の前に降伏し、反セミ運動に屈することを意味する」ことだったからだ。ところが、結果から言えば、シオニズムは、反ユダヤ主義者の「ユダヤ人よ、出て行け」という声に「正当性と妥当性」を与えることになった。こうして、現在の土地を離れてパレスチナでの国家建設を目指すシオニズムの理想は、一方で、現在まで住み続けた土地に定住し同化することを望む人々への嫌悪を強め、迫害の対象とされていく状況を作り出すこととなったのだ。

以上のように、置かれた環境は異なっているものの、『新青年』が対象読者とした青年たちと、同時期のユダヤ人は、第一次世界大戦後の世界において、国家とアイデンティティをめぐるアンビバレントな状況にあった。こうした両者の共通性こそが、本稿が『新青年』に主眼をあてて考察をする重要な理由である。

3. 『新青年』外の〈猶太〉表象

本稿は、『新青年』における〈猶太〉表象を検討することを目的とするものであるが、その特性を捉えるために、本節では『新青年』の外でどのような〈猶太〉表象があったのかを確認しておきたい。先んじて言えば、一九二〇年代周辺の〈猶太〉表象は、二つの傾向に大別できる。

まず、聖書に関する逸話に登場する〈猶太〉を描いた作品群がある。その一例としてあげられるのが一九一七年に発表された芥川龍之介「さまよへる猶太人[17]」だ。

「さまよへる猶太人」とは如何なるものか、彼は過去に於て、如何なる歴史を持つてゐるか、かう云ふ点に関しては、

如上で、その大略を明らかにし得たと思ふ。が、それを伝へるのみが、決して自分の目的ではない。自分は、この伝説的な人物に関して、嘗て自分が懐いてゐた二つの疑問を挙げ、その疑問が先頃偶然自分の手で発見された古文書によつて、二つながら解決された事を公表したいのである。さうして、その古文書の内容をも併せて、こゝに公表したいのである。

右の引用は、本作の冒頭部分であるが、こうして始まる本作は、キリスト教国に伝わる「さまよへる猶太人」の伝説について、語り手が二つの疑問を提示し、それがどのように解決に至ったかを語っていくという筋立てである。

また、一九二〇年に「大阪朝日新聞」「東京日日新聞」に連載された菊池寛「真珠夫人」[18]では、旧約聖書外典『ユディト記』に登場する「猶太の美しい娘」・ユディトについての逸話が、登場人物の状況を説明するために用いられている。物語の中心人物である唐沢家の令嬢・瑠璃子が、家の危機を救うべく、かねてより求婚してきていた荘田のもとへ嫁ぐことを決心し、それを父親に伝える場面において、瑠璃子は「妾はユージットになろうと思うのでございます」と告げ、その「勇ましい面影」に思いを馳せる。

以上のように逸話をもとに〈猶太〉を描いた作品群がある一方で、第二の傾向としてあげられるのが、外地で出会った〈猶太〉を描いた作品群である。その一例として、一九二六年に『文芸戦線』に掲載された里村欣三「苦力頭の表情」[19]がある。

視点人物である「俺」は労働者であるが「一つの土地に一つの仕事にものゝの半年も辛抱すること」が出来ず、放浪と就職を繰り返している。ロシア人娼婦に誘われた「俺」は言語の通じないその女に、幼少期に得ることの出来なかった「母親の慈愛」を感じ、三日三晩をその売春宿で過ごす。しかし、金の尽きた三日目の朝、女に部屋を追い出されてしまう。空腹を抱えたまま、行き場のなくなった「俺」は、苦力たちが食事をしている場に遭遇する。最初はその中に入ることを苦力頭から拒絶された「俺」自らシャベルを持って仕事に参加することによってその後の食事にも加えられることになる。その際、苦力頭から向けられた笑顔に、人種は違えど労働者としての共感の情を読み取った「俺」は「涙の出るやうな気持」を感じる。

本作は、里村が徴兵を逃れて満州を放浪したときの体験が下敷きになっているとされている。[20]こうした物語の中で、売春宿の金銭管理をする人物として描かれるのが「猶太の赤い顔のおかみ」である。また、里村は後に「放浪の宿」[21]においても、同様に「ロシア人の酒場」にいる「猶太系の赧ら顔の主人」を描き込んでいる。[22]

他にも、外地を経験した作家が〈猶太〉を描くケースとして、井東憲『アジアを攪乱する猶太人』（雄生閣、一九三八年一二月）が挙げられる。発行編輯兼印刷人を村松梢風が務めた、一九二六年四月刊行の雑誌『騒人』から登場した井東は、村松同様「上海熱に憑かれた作家」であり、ナップに所属したプロレタリア作家と位置づけられている。[23]井東は本書の序において「猶太問題こそ、吾々の直ぐ足許へ押寄せて来てゐる国際秘密力であ」ると位置づけ、「日本こそ、アジアこそ、猶太に穢されてはならぬ」と主張する。本書はそうした主張のもとに小説と評論が展開されている。

このように、内容の差異があるとしても、外地体験者、中でもプロレタリア作家と位置づけられる里村と井東が、〈猶太〉に着目していることは、日本文学における〈猶太〉表象を問題化するうえで看過出来ない。

以上、一九二〇年代周辺の日本文学における〈猶太〉表象を概観した。これらの作品群についての具体的な考察は別稿に譲ることとするが、このように様々な作家が、この時期に〈猶太〉を描いていたことは、日本における〈猶太〉言説が単に「ユダヤ陰謀説」の受け売りに留まっていなかったことの証左となるだろう。また、これらの〈猶太〉表象を文学の表現として捉えていくことで〈猶太〉という言葉に見いだされた多面的な意義を浮き彫りにできるのではないだろうか。その点を確認した上で、次節では、『新青年』に焦点を当てて考察を行う。

4. 『新青年』における〈猶太〉

『新青年』の総目次[24]を確認すると、創刊から廃刊までの三〇年間で〈猶太〉に関する記事は、二〇本程度である（表）。この記事数からは、同時期の文芸誌のなかで特段『新青年』が〈猶太〉に着目していたとは言い難い。しかし、これらの記事を概観することで、『新青年』固有の〈猶太〉表象を確認することが出来る。

まず『新青年』の誌上ではじめて〈猶太〉という言葉が確認出来るのは、一九二〇年一一月号に掲載された泉谷三郎「地上王国の建設を急ぐ　神戸在住猶太人の群」である。

本記事は、第一次世界大戦から逃れ、ロシアから来日した猶太人・カンターと、その周辺の「猶太国建設」を目指す猶太人を取材したものである。居留地の神戸において、カンターは商人として成功を収めたものの、猶太人ゆえに他の在留外国人から排斥されていた。しかしある時、彼の洋館のほど近くにヤブローフという男が越してくる。カンターの「淋しい思い」は、彼とその周囲の「猶太国建設」を目指す猶太人たちとの出会いによって払拭され、今日では、カンターもまたその計画のために奔走する様子が語られる。このようにシオニズム運動を肯定的に語っている点は本記事に特徴的な点である。そしてこうした語りは、海外雄飛というイデオロギーのもと植民活動を推奨していた当時の『新青年』の特色が色濃く反映されたものであろう。

また、創作としてはじめて〈猶太〉が描かれるのは、小山櫻「上海夜話　猶太人の鞄」（一九二六年三月号）である。

物語は上海・フランス租界に居を構える猶太人で高利貸しの大富豪・エデン氏が、突如行方不明となることから始まる。数日後、ある場所に金を埋めるよう指示する手紙が入ったエデン氏の鞄が邸宅にいる夫人に届けられ、その指示を果たすことによってエデン氏は生還するも、再び姿をくらまし、再び届いた鞄には、エデン氏の死を報告する「「猶太人の鞄」党本部」からの手紙が入っていた。

エデン氏の死から五年が経った物語後半、英文日刊新聞に「露西亜革命に纏わる一挿話」として、事件の真相が明かされる。この「猶太人の鞄党」は「目下労農露西亜政府に在つて某方面委員長」となっているZ氏が率いる一団の仮名であり、この人物は事件当時「極東赤化宣伝委員」として上海に滞在していた。露西亜

革命後、上海に逃れてきた露西亜人たちは「汎露西亜倶楽部」を形成しており、Z氏はそこに集う同胞の援助を名目に「露西亜系猶太人」であるエデン氏に寄附を求めていた。しかし「露西亜人は露西亜人、自分は自分」と、寄附を承諾しない「守銭奴」エデン氏に憤慨したZ氏は、エデン氏を監禁する。その後、釈放されたエデン氏は「Z氏一味の内情」を「某国総領事館」に密告し復讐を果たそうとするも、その一味にばれ、殺されてしまったのだった。こうした物語からは、「上海」という空間をイメージするための一素材として〈猶太〉が捉えられていたことが確認できる。[25]

以上のように、『新青年』における一九二〇年代の〈猶太〉表象は、その誌面で推奨されていた海外雄飛のイデオロギーとシンクロし、外地への関心が反映されたものであった。しかし、一九三〇年代に入ると、この〈猶太〉は当時主流となっていた「ユダヤ陰謀説」の文脈で描かれるようになる。[26]

例えば、一九三一年一二月号掲載の井上吉次郎「亡びて亡びぬユダヤ民族の謎」[27]は、「あらゆる民族国民」が「それぞれに独立にユダヤ人を嫌ふ」ことの根拠を「ユダヤ人そのもののうちに」見いだしていこうとする。また、一九三八年一月号掲載の高橋邦太郎「ユダヤ人の世界的大陰謀」[28]は、日本の国際連盟脱退や満州事変、その他様々な事件をユダヤ人と関連させ、「ユダヤ人の世界制覇、世界転覆の大陰謀」が着々と企てられつつあることを暴露する。

一九二〇年代には見られなかったこうした言説は、一九三〇年代の『新青年』誌面で度々確認できるようになる。そうした変化には、もちろん同時期の日本の国際的立場が大きく影響しているだろう。[29] しかし、探偵小説を看板の一つとした『新青年』において「ユダヤ陰謀説」的言説が増加した要因は、そうした因果関係に留まっていなかったのではないだろうか。

一九三五年七月号に掲載された原圭二「猶太禍」は、先に挙げた高橋の言説と同様に、日本を国際連盟脱退に至る「窮地に追ひこんだ」のは猶太人であり、「猶太人プラス猶太主義イクオール国際連盟」という国際連盟の内情を暴露し日本の窮地を訴える記事である。書き手の原圭二という人物は、満州において治安部参謀司第二課より刊行されていた雑誌『鉄心』[30]に「私設女間諜」[31]や「スパイの戦慄」[32]といったスパイ小説を書くほか、『新青年』においても一九三〇年代中盤以後、スパイ小説の執筆や翻訳、軍隊の宣伝などを行っていた人物である。[33] 原がどのような接点から『新青年』の執筆者に名を連ねるようになったのか、具体的な経緯は明らかでないが、同時期の『新青年』に掲載された探偵小説についての批評からは、原のような書き手が希求されていたことが看取できる。

ここでとりあげたいのは、一九三四年一二月号に掲載された大下宇陀兒「探偵小説の批評について」と、木村毅「国際的陰謀を描いた探偵小説を待望す」である。大下は、「純粋なる探偵小説」が「奇怪なる謎に発し、謎を解きつゝ筋を発展せしめ、最後に謎の本体を明らかにする」という「型」に陥っている状況を指摘し、そのような状況に対して「この型を打破つて呉れる外力」の必要性を説く。また木村は、大下と同様に日本の探偵小説に変化を求め、「探偵小説のテクニツクは考へつくされて行き詰まつたと云ふ説も聞くが」「テクニツクが、たとへ考えつくされたにし

ても、それが用ゐつくされてゐるとは、私は未だ考へない」として、「日本の探偵小説界に、一つ足らぬ種目」である「国際間のスパイ戦」を書くことで日本の探偵小説が新たな境地を開くことが出来ると述べる。

このように、「国際的陰謀」や、「スパイ」を描いた読み物は、探偵小説を更新する一つの手立てであり、その中に登場したのが〈猶太〉というモチーフであったのだ。

なお、実際に小説の中で〈猶太〉が描かれている例として挙げられるのが、一九四〇年六月号に掲載された小栗虫太郎「魔境征服シリーズ第八話　遊魂境」である。本作は、グリーンランドの未踏地のさらに奥に存在する伝説の地「冥路の国（セル・ミク・シュア）」についての領土獲得をめぐる物語である。主人公・折竹の仲間であると信じられていたロングウェルと、敵対するギャングであるルチアノが、実は同腹であったという結末で終る本作では、その共謀の目的に「ツイオン議定書」にある「猶太国」の建国が設定されている。

以上一九三〇年代以降の『新青年』には、陰謀の主として〈猶太〉を描く記事が多く散見された。ただし、そうした表象がなされる過程には、探偵小説を更新しようとする動きがあったことが確認できた。また、こうした二〇年代から三〇年代にかけての〈猶太〉表象の変化は、『新青年』という雑誌の変容を鮮やかに映すものだといえよう。

5．「黄色い猶太人」という視座

以上を踏まえて、本稿が最後に注目したいのが、二〇年代と三〇年代のちょうど境界となる一九三〇年一月号から三月号にかけて連載された谷譲次「黄色い猶太人」である。

谷譲次こと長谷川海太郎は、四年間のアメリカ放浪生活の末、一九二四年に帰国し、同年から『新青年』での活躍をはじめた。その後、谷は他に牧逸馬・林不忘の名を使い分け、様々なメディアで活躍していくこととなるが、本作は谷譲次名義で『新青年』に発表された最後の創作である。

本作が書かれた経緯としては、まず、一九二八年から約一年三ヶ月にわたって谷が妻の和子とともに『中央公論』の特派員として派遣されたヨーロッパ旅行がある。当時『中央公論』の主幹であった嶋中雄作は、「かねてから谷譲次名で発表される〈めりけんじゃっぷ〉ものに注目」していた。「雑誌の大衆化」のために「中央公論」誌の特色であった説苑欄をフルに活用することを考え」た嶋中は、「長谷川海太郎の才筆をそこに生かそうとこころみた」という。[34] その成果は、旅行の見聞記である「新世界巡礼[35]」や、後に牧逸馬名義で発表される「世界怪奇実話[36]」として発表されるが、その旅行から帰国した谷に、当時『新青年』の編集長を務めていた水谷準が「谷譲次」名義での「見聞記」を懇望して書かせたのが本作である。[37]

「マドリッドの乗馬服」、「聖なるレオポルド」、「ぴつく・B・B」の三話からなる本作は、マドリード・ウィーン・ロンドンを舞台に、語り手「僕」がその地に定住している「につぽん人」について語っていくというものである。「見聞記」として望まれていたにも拘わらず、創作性の強い本作の、それぞれの概略は以下の通りである。

第一話「マドリツドの乗馬服」は、マドリードに住む「カルルス三浦」という人物が、ニューカレドニア移民から、フランスを経て、スペイン・マドリードで「太陽の娘（イーハ・デル・ソル）」という喫茶店を開くまでの経緯を「ＤＯＮ・ジョウヂ・テネイ」と称する「僕」が、「海外奮闘出世美談（こんにちあるまで）」として語る。

第二話「聖なるレオポルド」は、ウィーンの街角の珈琲店で「君」「僕」「僕のマダム」が腰掛けているところに、突如、「聖なるレオポルド」と称する「明白ににつぽん人種」の男が加わってくる。「名所と女の」「ガイド」を自称する「聖なるレオポルド」は、娼婦のロウザのもとへ「君」を案内するが、実はこのロウザと夫婦関係にあり、これが「聖なるレオポルド」の商売であったことが語られる。

第三話「ぴつく・Ｂ・Ｂ」では、「僕」は訪問先のロンドンの新聞上で、ラスプーチン暗殺事件を題材とした劇に関する記事を目にする。これは舞台協会の宣伝係が「につぽん人」の「フリイ・ランス・リポウタア」である「ＥＳＱワラワラ」に執筆を依頼したものであったが、「ＥＳＱワラワラ」は、別の新聞にもラスプーチン暗殺にまつわる記事を書いていた。さらにこの事件の首謀者であるユスポフ公爵が自らの記事に対する反駁文を書くように仕向け、結果的に大金を手にする。「僕」は、この「ＥＳＱワラワラ」を「「ＰＩＣの主」のにつぽん人、英吉利ジヤアナリズムの「黒い馬（ダークホース）」」であると評し、幕となる。

本作はこれまでの谷譲次に関する先行研究においては殆ど注目されてこなかった。こうした研究状況は、先に挙げた水谷が「往年の軽快さや尖鋭さ」を欠いた作品と評価している[38]ことに示されるように、『新青年』におけるその他の谷譲次作品の陰に埋もれてきた証左であろう。ところが、〈猶太〉表象作品という観点から繙くと、重要な視座をもたらす作品である。

まず注目したいのは、「黄色い猶太人」というタイトルである。なお、この表現はタイトルのみならず、作中にも次のような形で登場する。

> ジョウヂ註――目下欧羅巴の、思ひがけない都会と田舎と山野に放浪しているにつぽん人――「黄色ＪＥＷ」――には、斯くのごとく、大戦のさい、ニュウ・カレドニア若しくは加奈陀等より、仏蘭西乃至英吉利の義勇兵よと煽てられ、半ば誘拐されて来て、戦後面白づくに帰国を拒絶し――十中の十まで洋婦との交渉意外に深刻化したため――自発的に無限長の草鞋を履きをる者非常に多し。けだしわがマヅリツド乗馬服の如き、其の最たるものならんか。
>
> （第一話「マドリツドの乗馬服」）

それが、僕に、「聖なる彼」への理解を一時に深めたやうだつた。（中略）そこには、このダニユウブの大都会で、商売女の客引きをして麺麭を割いてゐる「黄色いＪＥＷ」が、「聖なる彼」の形において存在してゐる。／だから「聖なるレオポルド」の西洋嫌いは、かういふ生活への感情的反逆だつたのだ。だから、自分にそんなことをさせる――しなければ明日から生きて往けない――西洋が――この場合では維也納が、長く居ればゐるほど、いやになつて来たのだ。

（第二話「聖なるレオポルド」）

引用にも確認出来るように、「黄色いＪＥＷ」という表現は「猶太人」のことではなく「につぽん人」のことを示している。本作の特異な点は「猶太人」という言葉の頭に黄色人種を示す言葉を繋げることで、「につぽん人」を指示している点である。ただし、ここで見逃してはならないのは、この「につぽん」という言葉が、作中において「日本」と共に用いられている点である。

傍点を付して記される「につぽん人」とは、第一話、第二話では「人種」を示すものとして用いられる。他にも、第一話では、カルルス三浦が「僕」のために話すのが「につぽん語」であり、第二話で「僕たち」は、「につぽん旅客」として認識されることで「につぽん人種」の聖なるレオポルドの仲間だと誤認される。また第三話でもＥＳＱワラワラは「「ＰＩＣの主」のにつぽん人」と「につぽん」が強調して示されている。一方で、作中では「日本」という語も用いられており、例えば、第二話では「日本人」洋行者についての批評が語られ、第三話では「日本生まれの日本人」という表現が確認出来る。

これらの用法を比較すると、「生まれ」と結びつき、国民国家「日本」という言葉に対して、「人種」や話語など、周囲から認識される個人の特徴を示すものとして用いられる「につぽん」という言葉は、「日本」を異化するものとして機能している。すなわち、「につぽん人」とは「日本」という国家に帰属する存在ではなく、周囲から「につぽん人」と目される存在なのだ。そしてその「につぽん人」に与えられるのが「黄色い猶太人」という呼称である。

ただし、本作における「猶太人」という語は、「につぽん人」に対してのみ、用いられているのではない。ヨーロッパ各地を舞台とする本作のうち、第二話、第三話では「猶太人」の描写も確認出来る。第二話で、「聖なるレオポルド」が「君」を連れて辿り着くのは、「猶太人街（ジュデンブラッツ）の裏町」の、ロウザの待つアパルトマンである。また第三話では、「ろんどんにおける猶太人の大巣窟」で「猶太人」の商人に追いかけ回される「僕」の体験が語られており、これらのは、国家の「資本主義的発展」を促す「資本主義建設の使徒」（第三話）とされている。本作において「黄色い猶太人」と呼ばれる「カルルス三浦」「聖なるレオポルド」「ＥＳＱワラワラ」が、それぞれに当地で生業を得ていることを思い起こせば、この呼称は第一に、「資本主義商業戦」において生き残る術を身につけた者であることを示唆する。

この点を踏まえれば、「黄色い猶太人」とは、本稿第二節でも言及した創刊期『新青年』が奨励していた海外雄飛と共通する点もある。しかし、「黄色い猶太人」は、その忠実な体現者という位置づけに留まるものではないだろう。

ここで思いおこしたいのが、第一話において示された「海外奮闘出世美談（こんにちあるまで）」という表現である。海外雄飛を想起させる「海外奮闘出世美談」に対して「こんにちあるまで」と仮名を付すことは、この物語が「海外奮闘」の「美談」を志向しつつも、それとして語ることの困難さを露呈させる。そして、こうした物語の特性は、全編を通じる語りにも見いだすことが出来る。

本作は全編を通じて、語り手「僕」が前景化されており、その

「僕」によってなされる語りは、書記行為を問題化するものである。具体的には、第一話では「物語の中心」や「話し甲斐」のある「話し」が想定されながらも、語りは何度も「傍路へ外れ」、その「中心」を語り損なっていく。また第二話においては、語りはじめた内容について「さう長くつゞいちや話しが困る」として、語りを省略することを繰り返す。しかしその一方で、「こゝでいきなり、一つのキヤタストロフを持つて来て、無理にでも爆発させてしまふ」と「味がないし」「映画のシネリオみたいに直ぐFINISHにな」ってしまい「今度は僕が困る」と、語りの引き延ばしを試みる。こうした「僕」の手法は、物語の本筋を曖昧化させるものであると言えよう。さらに、第三話では、バスの乗客と車掌の「ぴかでり」「乗車賃を何卒」というやりとりを短縮化した「ぴつく・B・B」という言葉が、本来の意味を無化しながら物語の随所で用いられる。「ぱちんと指を鳴らしてぴつく・B・B!と残念そうな顔をした」、「高価い割には、恐ろしくぴつく・B・Bの代物だつた」といったように、脈絡もなく用いられるこの言葉は、そこに代入される言葉を想起させる記号として機能している。

このように本作の語りは、そこにあるべき「物語」を暗示しながらも、そこから逸脱していくことで、語られない「物語」の内実を浮き彫りにする。こうした構造の物語が「黄色い猶太人」と題されることは、この呼称が与えられる「につぽん人」が、その内実を語り得ない存在であることを示している。翻って言えば、そうした国民国家との規範と結実しない、「日本人」ならざる「につぽん人」を語る際に用いられたのが〈猶太〉というイメージであったのだ。

6. 結語

本稿は、一九二〇年に創刊された『新青年』における〈猶太〉表象を中心に、その言葉がもたらす想像力について考察した。

従来、一九二〇年代から三〇年代にかけての「ユダヤ関連言説」の多くは、第一次世界大戦や露西亜革命後に流入した反ユダヤ主義言説が主流とされていたが、文学作品における表象として検討した結果、それらとは差別化しうる言説があったことが確認出来た。そのことを踏まえた上で、本稿では、雑誌『新青年』において、どのような〈猶太〉表象がなされていたのかを確認した。同時期、『新青年』以外では、聖書の逸話や外地と関連付けて表象されていた〈猶太〉は、『新青年』においては、何よりもまず、国民国家との関連の中で捉えられていた。

それゆえに、創刊から数年の間の一九二〇年代と、日本が国際社会から孤立していく一九三〇年代とでは、そこでの〈猶太〉表象も大きく変容していた。具体的に言えば、『新青年』において海外雄飛が説かれていた一九二〇年代には、外の世界への関心を反映したものとしてその表象があったのに対し、一九三〇年代には、探偵小説の更新が求められる中で、陰謀の成就のために国家間を暗躍する勢力として〈猶太〉が表象されるようになる。

このように大きく転換する〈猶太〉表象の中で、一九三〇年に掲載された谷譲次「黄色い猶太人」は、国家に属する「日本」国民ならざる「につぽん人」を描き、その存在に「黄色い猶太人」

という呼称が与えていた。国家という枠組から解放された存在を〈猶太〉という言葉を用いて表す本作は、脱国家のロマンをそこに見いだすものとして重要な視座をもたらす作品であった。そして、谷が本作と同様の体験をもとに描いた他作品で、こうした〈猶太〉表象が描かれていたいことを鑑みれば、こうした〈猶太〉表象を描かせたのが雑誌『新青年』だったのではないだろうか。

創刊以降、絶えず「脱皮」を繰り返し、その内容において大きな「振り幅」を持つ[39]『新青年』は、それゆえに、〈猶太〉という言葉の様々な位相を引き出すものであった。それは、国家という枠組への信頼と不信が色濃く表れたものであると同時に、それを越え出ていくことへのロマンが仮託された言葉だったのだ。

注

（1）高尾千津子「ユダヤ陰謀論――日本における「シオン議定書」の伝播」（『近代日本の偽史言説――歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』勉誠出版、二〇一七年一一月）

（2）高尾千津子「シベリア出兵と『シオン議定書』の伝播1919-1922」（『ユダヤ・イスラエル研究』日本ユダヤ学会、二〇一三年一二月）

（3）宮澤正典『近代日本のユダヤ論議』（思文閣、二〇一五年一二月）

（4）ハンナ・アーレントが『全体主義の起原I反ユダヤ主義』（大久保和郎訳、みすず書房、二〇一七年八月）において、「反ユダヤ主義とユダヤ人憎悪は同じ者ではない。ユダヤ人憎悪というものは昔からずっと存在したが、反ユダヤ主義はその政治的なまたイデオロギー的意味においては一九世紀の現象である。」と述べているように、近代の「反ユダヤ主義」とそれ以前からの「ユダヤ人嫌悪」は区別すべきものである。前者は、ユダヤ人と直接出会い「憎悪」を懐いた経験のない者でも持ちうるものである。そうした点では、日本における「反ユダヤ主義」もそれらの類を外れるものではない。またこの点については、高尾千津子「シベリア出兵と『シオン議定書』の伝播1919-1922」（『ユダヤ・イスラエル研究』二〇一三年一二月）にて、「近代日本における反ユダヤ主義は日本固有の「ユダヤ人問題」ではなく、西洋キリスト教思想の導入に付随して生まれた問題であった」と述べている。ただし本稿では、そうした反／親ユダヤという二元論的価値観に回収することのできない人々の想像力に着目するために、〈猶太〉を日本固有のイメージとして考察を進める。

（5）早尾貴紀「「偽日本人」と「偽ユダヤ人」、そして「本来的国民」」（『ユダヤとイスラエルのあいだ―民族／国民のアポリア』青土社、二〇〇八年三月）によれば、今日的な観点において、「ユダヤ人」と記した際、その定義は、ユダヤ教を信仰するユダヤ教徒、「古代イスラエルの地にルーツを持ち血筋を継いでいる」者、イスラエルの法規定によって「国民化」された者、と多様である。

（6）市川裕「宗教学から見た近代ユダヤ人のアイデンティティ――近代国民国家と宗教の定義――」（市川裕、臼杵陽、大塚和夫、手島勲矢編『ユダヤ人と国民国家―「政教分離」を再考する』岩波書店、二〇〇八年九月）

（7）鈴木貞美「プログレマチック：装置としての『新青年』」（『昭和文学研究』一九八四年一月）

（8）森下雨村「十年前の『新青年』」（『新青年』博文館、一九二九年一月）

(9) 鈴木前掲論。
(10) 山下武『新青年をめぐる作家たち』(筑摩書房、一九九六年五月)
(11) デイヴィッド・グッドマン、宮澤正典著、藤本和子訳『ユダヤ陰謀説―日本の中の反ユダヤと親ユダヤ』(講談社、一九九九年四月)
(12) 宮沢正典『増補　ユダヤ人論考』(新泉社、一九八二年七月)
(13) 川崎賢子「海外雄飛の背景と内実」(『新青年読本』作品社、一九八八年二月)
(14) 笠井潔・鈴木貞美・松山巌「シンポジウム　昭和モダニズムの光芒――『新青年』の世界――」(『早稲田文学』一九八八年六月)
(15) 笠井潔・鈴木貞美・松山巌、前掲記事。
(16) I・ドイッチャー著、鈴木一郎訳『非ユダヤ的ユダヤ人』(岩波新書、一九七〇年五月)
(17) 『新潮』(新潮社、一九一七年六月)
(18) 「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」一九二〇年六月九日～一二月二二日
(19) 『文芸戦線』(文芸戦線社、一九二六年六月)
(20) 須田久美「里村欣三「苦力頭の表情」の世界」(『社会文学』二〇〇四年六月)
(21) 『改造』(改造社、一九二七年七月)
(22) 大家眞悟『里村欣三の風景――小説・ルポルタージュ選集全一巻』(論創社、二〇一九年三月) 作中に登場する猶太系の人物について、大家は「作品にリアリティを与え」る要素として指摘している。
(23) 大橋毅彦「井東憲――〈朦朧都市〉上海と〈情報都市〉上海のあわい」(和田博文ほか『言語都市・上海』藤原書店、一九九九年九月)
(24) 『新青年』研究会編『新青年読本』(作品社、一九八八年二月)
(25) 『新青年』では、一九四一年一一月号掲載の棟田博「上海夜話」においても、上海のユダヤ人について報告されている。
(26) 山本伸一「坂井勝軍の歴史記述と日猶同祖論」(小澤実編『近代日本の偽史言説――歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』勉誠出版、二〇一七年一一月)
山本は、一九二〇年―一九三〇年代のユダヤをめぐる言説のうち、主流を占めていたのが「反ユダヤ主義に基づく言説」であり、第二に「それに対抗して、反ユダヤ主義と一定の距離を保つ政治的立場」が、第三に「ユダヤ教やユダヤ人の歴史に関する研究」があったことを指摘している。
(27) 『新青年』(博文館、一九三一年一二月)
(28) 『新青年』(博文館、一九三八年一月)
(29) 宮澤正典は、日本における「ユダヤ問題」議論の歴史を四期に分けて整理し、「ナチス・ドイツの成立から崩壊の時期に一致する」第二期には、反ユダヤ書籍が増加したことや一九三八年には『反共情報』(国際反共連盟)、一九四一年には『猶太研究』(国際政教学会)が創刊され、それぞれ反ユダヤ活躍の舞台となったことを指摘している。
(30) 治安部参謀司第二課編『鉄心』は、旧満州国の首都新京にて一九三五年二月より刊行された。国立国会図書館には一九四〇年一〇月号まで所蔵されているが、本雑誌がいつまで刊行されていたのかは明らかになっていない。
(31) 『鉄心』(治安部参謀司第二課編、一九三六年九月)
(32) 『鉄心』(治安部参謀司第二課編、一九三七年六月)
(33) 原が『新青年』誌上にはじめて登場するのは、一九三四年四

月増大号に掲載された「捕った馬占山」である。その後、『新青年』の軍事色が強まる一九三七年頃からは「戦争だ！覚悟はよいか？」（一九三七年一月新年特大号）、「〈陸軍〉武勲赫たる陸軍史〈海軍〉帝国海軍武勲史」（一九三七年特別増刊（輝く皇軍）号）等、軍隊に関する記事を執筆している。また、一九三八年五月増刊（世界名作）号掲載のオー・ヘンリー著「風刺小説　巡査と賛美歌」以後、一九四〇年新春増刊号まで、翻訳者としても度々登場している。

(34) 尾崎秀樹『異形の作家たち』（泰流社、一九七七年三月）

(35) 「新世界巡礼」は『中央公論』（中央公論社）一九二八年八月号から一九二九年七月号まで連載され、後に『踊る地平線』（中央公論社、一九二九年）として刊行された。

(36) 「世界怪奇実話」は、『中央公論』（中央公論社）一九二九年一〇月号から一九三三年三月号まで連載された。また連載期間中に、『世界怪奇実話全集第一篇』（中央公論社、一九三〇年）、『世界怪奇実話全集第二篇』（中央公論社、一九三一年）『世界怪奇実話全集第三篇』（中央公論社、一九三二年）が刊行されている。

(37) 水谷準「なつかしき『新青年』時代」（『新青年　復刻版別冊』国書刊行会、一九八五年二月）

(38) 同右。

(39) 川崎賢子「『新青年』の誕生とその時代」（『新青年』研究会編『新青年読本』作品社、一九八八年二月）

【附記】

『新青年』からの引用は、『新青年』復刻版（国書刊行会　一九八五年二月）に拠る。

引用に際し、原則旧字は新字に改め、仮名遣いは原文ママとした。なお、ルビは必要な場合を除き適宜省略した。また引用文中における傍線はすべて論者に拠る。

（むらまつ　まりあ　本学大学院博士後期課程）

表　『新青年』における〈猶太〉関連言説一覧

時期区分	編集長	発行年月	記事タイトル	筆者
探偵小説黄金期 1923～1927	①森下雨村（1920. 1～1927. 2）	一九二六年三月	（創）上海夜話　猶太人の鞄	小山櫻
創刊期 1920～1923		一九一〇年一月	（読）地上王国の建設を急ぐ　神戸在住猶太人の群	泉谷三郎
モダニズム期 1927～1937	④水谷準（1929. 8～1937. 12）	一九二一年一月	（読）老いたる猶太人	青田千里
		一九二〇年一月	（創）黄色い猶太人第一話　マドリッドの乗馬服	谷譲次
		一九二〇年一月	（創）黄色い猶太人第二話　聖なるレオポルド	谷譲次
		一九二〇年一月五日	春期増刊号　（創）殺された猶太人	H・H・エーヴァルス
		一九二〇年三月	（創）黄色い猶太人第三話　びっくり・ＢＢ・猶太人	谷譲次
		一九二一年一月	（読）とびてしびぬユダヤ民族の謎	井上吉次郎
		一九二四年四月	（創）黒死館殺人事件	小栗虫太郎
		一九二四年四月	（読）暴君ネロ	志摩達夫
		一九二四年四月	（読）〈独・露・米をあばく〉　猶太人の新しい手口　猶太人の新しい手口　業界図会	横生太
		一九二五年七月	（読）猶太禍	原圭一
		一九二八年一月	（読）ユダヤ人の世界的陰謀	高橋邦太郎
	⑤乾信一郎（1938. 1～12）	一九二八年三月	（創）この猶太人を見よ	ヘンリー・ウェイド（妹尾アキ訳）
		一九二八年五月	（創）猶太の胸甲	ユナン・ド・ルル（横溝正史訳）
	⑥水谷準（1939. 1～1946. 9）	一九四〇年六月	（創）魔境征服　シーズ第八話　遊魂境	小栗虫太郎
		一九四一年一月	（コ）〈世界トピック集〉　ユダヤの追放	高橋邦太郎
		一九四一年六月	（読）猶太人はどこへ行く？	鈴木十郎
		一九四一年一〇月	（コ）ユダヤ学者の世迷言	―
		一九四一年一一月	（読）上海近影	横田傳
		一九四一年一二月	（読）これがドイツ魂だ！	須地文三

※『新青年』区分については江口雄輔「新青年』とその時代」（『青土社、一九八七年九月）に従った。また、記事タイトルの略号は『新青年読本』（作品社、一九八八年二月）に従い、（創）＝小説・詩などの創作作品、（読）＝創作以外の読物・記事・座談会、（コ）＝コラム記事としている。

※掲載作品は、①～⑥は編集長の就任順を示す。タイトルに「猶太」「ユダヤ」が含まれるものを可能なかぎり選出した。